資料２

銅鉦鼓（どうしょうこ）　附（つけたり）　鉦架（しょうか）

＜概要＞

法　量　　（鉦鼓）　鼓面径 20.8cm　口径 23.1cm　側面厚 6.0cm
　　唇厚 1.2cm　耳幅 5.9cm
　　（鉦架）　高 42.3cm　笠幅 45.8cm　脚幅 51.5cm　奥行 24.8cm

時　代　　室町時代（鉦鼓）長禄元年（1457）
　　（鉦架）15～16 世紀

本品は、念仏に用いる鉦鼓で、脚をもたず架台（かだい）に懸垂（けんすい）する形式である。銅、鋳造で、鼓面は中央（径 12.5cm）が低く立ち上がり、外側に２条[1]の細隆線（さいりゅうせん）をめぐらせている。鼓面の中央はわずかに凹面をなし、桴（ばち）の打痕（だこん）を少数ながら認めることができる。また、口縁（こうえん）には頂部から左右方向へ１行ずつ、以下の銘文を刻んでいる。

「長禄（ちょうろく）元年十一月十五日　信光明寺」　「願阿弥陀佛也」

鉦架はケヤキ製で、太い部材を鳥居形に組み合わせている。表面の仕上げは、砥粉（とのこ）下地に黒漆を塗っている。剥落が著しいものの細かな無数の断文（だんもん）[2]の様態から、室町時代まで遡る品であると考えられる。

もとは、一口のみを単独で、架具に掛け、念仏を唱えながら叩き行脚（あんぎゃ）する、本来の念仏用鉦鼓として、室町時代前期の長禄元年（1457）に製作、使用されたものと考えられる。その後、信光明寺に入り、双盤[3]として用いられるようになった。

本品は中世に双盤として使用された鉦鼓例としても全国的に稀有な作品であり、中世三河浄土宗の活動の実相を具体的に物語る歴史資料としての価値も高い。

---

[1] 条：すじ。すじ状のもの。
[2] 断文：漆面に生じる亀裂のこと。
[3] 双盤：寺院で法会の際に打ち鳴らす金属製の盤のこと。

銅鉦鼓（どうしょうこ）　附（つけたり）　鉦架（しょうか）

（愛知県教育委員会提供）